

『怪談』より「破られた約束」

—女の嫉妬と建前—

外国語学部 国際文化交流学科 4年

長坂 万葉

はじめに

『破られた約束』あとがき¹より

「私は言った。「酷い話だ。死者の復讐は男に対して為されるべきだったのだ。」しかし、

この話をしてくれた友人はこういった。「男性はみなそう考えます。しかしそれは女性の考え方ではありません。」その友人の言ったことは正しかった。

『破られた約束』²は小泉八雲による文学作品集『怪談』に収録されている話のひとつである。この物語を端的に説明すると、嫉妬に狂った亡き妻が夫の新しい妻を殺してしまうというものである。上記のあとがきは、この物語を受けて小泉八雲もといラフカディオ・ハーンが友人に言った言葉である。一説によれば、この友人とは実はハーンの妻であるという。西洋人のハーンと日本人の妻。日本人女性が理解できるというこの物語は何なのだろうか。

そして、本論ではなぜ「先妻の恨みは若妻に向かったのか」という点を問題として進めていく。あらすじは以下のとおりである。

妻の死の間際、妻と夫は二つの約束を交わした。1つ目は、妻の死後も再婚はしないこと。二つ目は死んだら妻を庭の隅にある梅の木の近くに鈴と一緒に埋めることであった。妻の死後、夫は約束通りに妻を庭に埋める。再婚しないと誓った夫であったが、周囲の強い勧めにより若い女と再婚してしまう。祝言³をあげてから七日目の晩、夫が夜中まで城に残らねばならなくなつた。初めて一人で夜を過ごす若妻の枕元に先妻の亡靈が鈴の音と共に恐ろしい姿で現れる。先妻の亡靈は若妻に家を出していくように脅

し、更に夫にこの出来事を話さないよう口止めをする。悪夢を見ていたのだと思うようにしていた若妻であったが、翌日も妻の亡靈が現れものすごい形相でせまってきたために実家に戻りたいと夫へ懇願する。突然妻から離縁を望まれた夫は納得がいかず問い合わせると、若妻は夫に全てを話してしまう。亡靈の存在を信じない夫だったが、妻がひどく怯えているので警護に慣れた兵を付け出かける。警護についての家臣との話に熱中し恐ろしいことなどほとんど忘れかけていた若妻であったが、どこからともなく先妻の持つ鈴の音が聞こえてくる。若妻が大声で叫んでも、家臣のもとに駆け寄って体を揺さぶっても、家臣はぴくりとも動かない。彼らは、若妻がひどく怯え助けを求めていたのがわかつっていたが、身動きひとつとれず、何も見えない、聞こえない状態になり、しまいに眠りについてしまった。翌朝夫が家に帰ると、若妻は首がもぎ取られた無惨な死体となっていた。夫と家臣が死体から続く血の跡を辿ると先妻の亡靈がおり、その手には若妻の首があった。家臣の一人が先妻に向かって斬りつけると先妻の亡靈は崩れ落ちたが、右手だけは若妻の首を掴んだまま離さなかつた。そしてその手は、若妻の首をすたずたに引き裂き続けていたという。

先述の通り、ここでの問題提起は「なぜ先妻の恨みは若妻に向かったのか」ということである。本論文では、この問題について「I 先妻の心情の推移」「II 夫の態度から見る男の価値観」「III 若妻が真実を話した理由」この三点に分けて、考察していく。武士がいた時代の価値観や、男女によって変わる考え方の違いなどを考慮し、現代の私たちに通ずる点があるか、彼らの言動への共感点があるかという点についても注意深く考察していく。

I 先妻の心情の推移

はじめに先妻の心情を生前と死後それぞれの言動に注目しながら考察していく。

生前の妻はというと、嫉妬深い印象は無く、死の間際には笑みを持って死に逝くような穏やかな女性として描かれている。更に、夫に自分の死後の再婚相手は誰にするのか尋ねており、再婚を認める意思を夫に見せているのだ。ただ、夫が再婚しないと言った後、妻は「武士の信義にかけて？」(p.258)と夫に聞き再度、約束を誓わせるのだ。武士にとって、「武士の信義」に誓ったことを破るというのは武士が廢る、すなわち大きな恥になるのである。また、「信義」という言葉だが、『新明解国語辞典 第六版』(三省堂 2005年)によると、「いったん約束した事は、時間がたって環境が変わっても、その通りに実行すること。」とある。「武士の信義」という言葉は、何があっても約束を破ってはいけない重みを感じる言葉である。それだけ先妻は、再婚しないという約束を守って欲しかったのだ。さらにその後、妻は自分を庭の木の近くに植えてほしいと言い、「庭からなら、ときにはあなたのお声を耳にし、春には花を愛でることもできましょう」(p.259)と喜ぶ。この生前の妻の様子から、夫の行く末を思い再婚を望んでいるよう振る舞っていたが、本当は夫のそばに死後も寄り添いつづけたいという先妻の願いが窺える。この時点で妻の本音と建て前とのズレが生じていることが窺える。

次に死後、亡靈となって現れる先妻の様子を考察する。先妻が現れるのは、夫が再婚した直後ではなく、祝言から七日経ち初めて夫が家に不在の晩に現れるのである。そして先妻が若妻に言った言葉が次の文章である。

「この屋敷の女主人は、わたしなのだ。出てお行き。でも、出て行く理由は、誰にも話してはならぬぞ。もしもあの人に打ち明けようものなら、おまえを八つ裂きにしてくれるからな！」(p.263)

若妻に自分の立場を示したうえで脅し、更に自分の行いが夫にバレない様に口封じをしている。この

時点で、先妻の恨みの対象は若妻一点にのみ向かっている。まず、夫が不在の時に現れたこと。また、若妻を「おまえ」、夫のことを「あの人」と差をつけて呼んでいること。これらの点から、推察できる。若妻を脅していることを知られたくない、今の恐ろしい姿を現したくないというのは、まだ夫を慕っているという気持ちの現れである。初めから若妻を殺さずに、警告をしていく点にも妻が夫を思う気持ちが窺える。もし、夫の家で殺人があったなど世間に知られたら良くない噂が立ち、夫の評判が下がってしまうかもしれない。先妻は、なるべく夫が悪く見えないよう、若妻の身勝手で家を出ていくことにしたかったのだ。

また「この屋敷の女主人は、わたしなのだ。」という一文だが、この文からも先妻の本音と建て前のズレが見受けられる。果たしてこの先妻は家の女主人であることを理由に若妻を追い出すのであろうか。女主人であるという責任から、若妻を追い出すのであれば、八つ裂きという言葉は使わないであろう。さらに、武家の女主人としての勤めを果たしたいという思いがあったなら、そもそも若妻を追い出すということはありえないである。なぜならば、武家にとって子孫を残し家を存続させることは重要なことであり、子も産めず病で死んでしまう自分を恥じ、若妻に家の存続を託すのが真に武士である夫を思う女主人である。先妻は夫だけではなく、若妻にさえも自分が嫉妬から若妻を追い出そうとしていることを知られたくないのである。この場面まで先妻は、自分の本当の気持ちを誰であっても口に出すことはしないのである。

先妻がなぜ嫉妬の感情や恐ろしい一面を見せないようにしているかというと、武士の妻であることが一因であると考えた。江戸時代前期、「女鏡秘伝書」という女性教養書があった。刊行された当時、多くの人に読まれたという。この本について、中野は次のように説明している。

「『殿をもちてよりは、何事も殿の心にしたがふべし』とあって、夫が花や月を好むようなら庭に花を植

えて大切にして、清かな月夜には月を眺めて酒、琵琶、琴など、なにごとも夫が好むことをして過ごすのがよい、これらは夫婦の縁を深めることになる、とする。」(中野 2014年p.46)

中野の解説では「人間関係の諸側面において、つねに、和やかに愛らしさを保つことを求めているのである。」(中野 2014年p.48) とある。この時代、夫に合わせて生きるのが良い妻であり、夫の前では穏やかに愛らしくいることを良しとされていたのである。こういった価値観の中で生きてきた妻は、個人の願望や感情を出すことより夫の前では穏やかでありたい、良き妻の姿を見せたいという考えがあったのである。本音で夫に望んでいることがあったとしても、夫が望む行いをするのが良き妻であったのだ。先妻は、夫の前で夫が好まないことを行う自分など見られたくなかったのである。

ここまで、先妻としての威儀を示し理性をもって、若妻に警告し続けていた妻であったが、若妻が夫に自分のことを全て話してしまったことにより、先妻の様子は一気に豹変していく。夫と臣家が、若妻の死体から続く血を追った先に現れた先妻の亡靈の描写が以下である。

「あやかし目前で蝙蝠のような奇声をあげる魔性に出くわしました。その魔性の女は、とうの昔に埋葬されたはずの先妻で、ものすごい形相をしており、一方の手には鈴、片方の手には血の滴り落ちる若妻の首を持ったまま、墓の前に立ちすくんでいました。」(p.268)

この文では、もはや先妻を「魔性」と言い表しており、死にゆく直前に笑みを浮かべ美しい死に顔と描写されていた先妻は「ものすごい形相」に変化している。夫の前では穏やかな姿を見せ続けていたのに夫が現れても若妻の首を離さない様子から、若妻を絶対に許さないという強い恨みが窺える。この先妻はもはや夫を夫と認識しておらず、若妻への恨みだけが残ったように見受けられる。夫に執着する亡靈ではなく、それを超えて若妻への恨みが詰まった

化物に変化したのである。また、家臣が妻を斬りつけ、妻の体が崩れ落ちた後の場面では、

「それでも肉の削げ落ちた右手は、手首から斬りおとされても、相変わらずごめきのたうち回っていました。…その右手の五指は、血まみれのままの若妻の首をぐいと掴み取り、かきむしっては、ずたずたに引き裂いていました。」(p.269) とある。

この場面からも、先妻の夫の前では良き妻でありたいという考え方や、若妻が家を出していくのなら見逃そうと考えていた理性が無くなり、ただただ若妻への嫉妬に満ちた化け物に成り果ててしまっていることが分かる。若妻が夫にすべてを話すということが、先妻がずっと抑えていた嫉妬の感情を爆発させるトリガーとなってしまったのだ。先妻にとって、若妻を殺さず出していくことを忠告したのは最大の譲歩であったのだろう。嫉妬で若い女を殺す女にはなりたくない、できることなら殺さずに若妻にどこかへ行つてもらい、夫と二人で穏やかに過ごしたかったのだろう。しかし、この若妻はあろうことか黙って出していくでもなく、夫を説得するでもなく、全て真相を話してしまったのだ。死後もなお良き妻でありたかった先妻の望みをいとも簡単に壊され、理性が無くなつたのである。

そして、若妻への嫉妬の感情のみで動いているのが最後の場面の先妻なのである。首を執拗にかきむしっている場面でもそのことは分かる。首というのは、つまり顔であって若妻をよく表している部分でもあるのだ。本文で後から結婚した妻が、わざわざ若妻と記載があり17歳などはっきりと年齢が書かれているところから先妻よりも年齢がずっと若かったことが推測できる。そして、夫が若妻のことを日が経たないうちに好きになる点や、護衛の兵が若妻を励まそうと面白い話をするのも、ひとえにこの若妻がかわいく気立てがよかつたからであろう。そういう夫を虜にしてしまった顔が憎い、自分より若いくせにという妬みが最後の場面から伝わってくるのだ。

II 夫の態度から見る男の価値観

次に、夫の言動から当時の男の価値観を考察していきたい。そもそも、当時の武士にとっては再婚しないと約束すること自体がおかしいのである。武士にとって、家を存続することがまず大事なのだから、再婚しないと妻に約束したのは、極めて武士としては誤っているのである。後にも先にも、夫が武士としての判断を優先させなかったのは、冒頭のみである。夫がただの慰めで再婚しないと言った訳ではないのは、『『おまえの後に、誰をこの家に入れるというのか。拙者には再婚するつもりなど、いっさいない』この言葉は、夫のまったくの本心から出たものでした。』(p.258) という文からも分かる。それほどまでに、妻のことを愛しており仲の良い夫婦だったことが冒頭の場面からは読み取ることができる。

武士としての務めを放棄するくらい妻を愛していたにも関わらず、再婚してしまったのはなぜなのか。そのきっかけとなったのが、親戚や友人から再婚を強く勧められたことである。その中に「武士として生まれた以上、嫁をもらうのは務めであろう。子どももなく死んだら、誰が先祖を供養してくれるというのか」(p.261) という文がある。恐らくこの言葉で、自分の武家としてしなければいけないことを思い直したのである。武家というのは、先祖代々続きその先も守っていかねばならないものであり、ある一代の感情でその流れを止めることは許されない。ただここで、問題となるのが「武士の信義」にかけて誓った先妻との約束である。これを破ってしまっては、「武士の信義」はどうなるのか。ここでの夫は、男と女の間での義理を通すことより、武家を存続させるという社会的義理を優先させたのである。この時代ではそれだけ、個を通すよりも社会規範に則ることのほうが重要であったのだ。ただ、夫がこれを望んでいたかというとそうではなく、再婚が決まった夫の心情としての一文では

「そして、庭にある先妻の墓から無言の責め立てが聞こえていたにもかかわらず、侍は心から新しい花嫁を愛するようになりました。」(p.261)

とあるのだ。先妻との約束を破ってしまった罪悪感を感じ、先妻から責められているように感じていることが分かる。ここでの夫の認識は、先妻が自分のことを恨んでいると思い、若妻が先妻にどう思われているかは考慮していないのである。実際はというと、亡靈の妻は若妻を恨み、夫には一切の危害も加えず恨み言も言わない。夫は先妻の恨みが若妻に向いていることなんて、予想していないのである。冒頭の小泉八雲のあとがきのように、男には女が女を恨む気持ちが推測できないのだ。

また、離縁したい理由を言わない妻に対して「一納得のいく理由を聞かぬうちは、おまえと別れるわけにはいかない。家名は、汚すことなきよう守っていかねばならないものなのだから」(p.265) と言い放つ。ここで夫は若妻が心配という言葉をかけるよりも、武家として家を存続させることに重きを置き、またそれを妻に言い聞かせて訳を話させようとするのである。さらに若妻が恐ろしい出来事を打ち明けた後でも、「誰がおまえにそんな馬鹿げた話を吹き込んだのであろう。この家で悪い夢を見たというだけで、離縁するわけにはいかぬ。」(p.266) と妻の話を信じておらず、妻の様子や感情論よりも理にかなっているか、武家としてどうかを気にして行動している。笠谷によると、武士の生き方の手本とされた書に『甲陽軍鑑』があるという。笠谷は武士にとっての奉公がどういうものなののかが書かれている部分を以下のように解説している。

「『何の道も、家職を失はん事勿体なし、某家職とは、武士の家に生るゝ人は奉公也』
どの道であっても、家職を失うことは残念なことである。その家職とは、武士の家に生まれた者で言えば、奉公である。」(笠谷 2017年p.26)

武士にとって奉公とは最も大事なことであり、たとえ結婚したばかりの妻が離縁したいと言ってしまう位怯えていても、奉公にでかけることが優先される。また、先妻との約束があっても、家の存続のために再婚する。今の価値観で見ると、夫の言動は冷

たく見え、先妻との約束を破ることも不誠実に見えるが、社会規範に則り武家としての勤めを果たしていく、武家社会からすればこの一連の行動は当然なのである。

III 若妻が真実を話した理由

この物語では、若妻が真実を夫に話したところから一気に話が急転していくが、若妻が話せば自分が殺されてしまうと分かっていたにも関わらず話してしまったのはなぜなのか考察していく。

若妻が初めて一人で夜を過ごす場面で、若妻は先妻の靈に以下のような言葉を浴びせられる。「この家から出でいくのだ。出でいけ。この屋敷の女主人は、わたしなのだ。出でお行き。…」(p.273)。ここで先妻は離縁しろとではなく、出でいけと言っているが、それには当時の離婚の手順が関係していると推察した。当時、妻から一方的に離縁することはできなかったのである。妻が離縁したい場合はどうするかというと、妻は夫に頼み離縁状を書いてもらうことで、離婚することができる。当時、離縁は珍しくなく離縁する時に書く三くだり半には妻の再婚を認めることが記載されていた。また3行半程度の文書なので書くのに苦労するという訳でもない。とはいっても、やはり女性には離婚請求権がないこともあり、妻が離婚したい場合は3行半とはいえ理由を用意しなければならない。夫は何も悪くないのに大きな理由もなく離縁してほしいと告げるのは、はばかられることである。そのために、先妻の立場としても勝手に離縁をすすめるのは武家の妻であったがためにするのがはばかられて、先妻なりに濁して若妻に伝えたかったのである。武家の妻の建前としては離縁しろとは言えないが、出でていってほしいという言葉の本音は離縁してほしいだったのだ。

また、結婚は家の存続のためにむすばれるものという考えが武家社会では広まっており、「女大学」⁴という江戸時代の女子教訓書には、「女は夫をもって天とす。返すがえすも夫に逆らひて天の罰を受べからず」(高木

1987年p.13) とある。妻にとって夫は絶対的な主人という考えが推奨されていたことがわかる。こういった背景から若妻も最初に、「このようなことを申し上げるのは恩知らずで、大変なご無礼とは存じますが、わたくしは実家に戻りとうございます。すぐにこの家を出でたいのでございます。」(p.264) と離縁ではなく、出でていきたと懇願したのではないか。自分から離縁をしてほしいとは言い出せなかったのである。また、若妻のなかでも先妻の存在は恐ろしくはあるものの幽霊という不確かな存在であったがために、一時的にでも家を出でていけば先妻の亡靈は消えるかもしれないという希望があったのであろう。しかし夫の「おまえに何の落ち度もないのに、実家へ返すというには、世間にも申し訳が立たぬ。理にかなった理由----わしに合点がいくようその訳を話してくれれば、願い通り、離縁状も書けよう。…」(p.265) という言葉により、話さないとどうにもできない、また若妻自身が夫に恩を感じていることもあり、話してしまったのだ。

そもそもこの時代に、若妻が夫に何も告げず離縁することは可能だったのだろうか?高木によると、四つの方法があったという。一つ目に、夫が妻の承諾なしに持參財産を質に入れたとき。二つ目に妻と別居もしくは音信不通、つまり事実上の離婚状態が三、四年続いたとき。三つ目に髪を切ってでも離婚を願うとき、あるいは夫を誣告⁵したとき。四つ目に比丘尼寺に駆け込んで、三年が経過したときである。ただどの選択も17歳という幼い若妻にとっては難しいものだったのであろう。あるいは、離縁する方法を知らなかった可能性もある。そして、離縁状に書けるような言い訳や策も浮かばない若妻は、夫にすべてを打ち明けざるを得ない状況になってしまったのだ。

実際に、江戸時代には多くの女性が離縁し再婚したそうだが、この物語の若妻はその若さと殺されるかもしれない晩に兵士達と話しているうちに先妻のことを忘れてしまうくらい素直な性格だと見受けられる。この若さゆえの浅慮が先妻の逆鱗に触れてしまったのではないだろうか。

さいごに

妻の嫉妬が若妻に向いた要因の一つにまず、男尊女卑で武家における主人の地位の高さから夫は尊敬の対象であるために恨みの対象にはならなかったということ。また、女は男の前では慎ましく感情的な一面を見せるのは恥であるという価値観から夫の前で嫉妬の感情を見せなかつたという社会的要因が挙げられる。

その次に、本文を読み取り感じたのは、先妻の良き妻でありたいという強い思いである。冒頭の場面からは先妻と夫がお互いに思いあう、非常に仲の良い夫婦であったこと、先妻が亡靈となつても尚、自分の恐ろしい面を夫に見せまいとしていたことから、生前も夫の前では良い妻で居続けたことがわかる。その積み上げた良き妻としての姿を崩した若妻へ殺意が向くのも致し方がない。自分の中の妬みや恨みといったマイナスの本心を知られたくないという気持ちは、対象が大事であればあるほど大きくなるもので、結果夫へ恨みの感情は向かず、若妻にその分大きな嫉妬の感情が向かつたのである。

また、先妻が、夫を殺さなかつたのは現世で自分を思う人がいることこそが重要だと考えていたからではないか。この世にいなくても自分の存在を確立してくれる、思い続けてくれる存在が夫であった。しかし若妻の出現により、夫が自分を思う気持ちが薄れてしまうと考え、いなくなつてほしいと願つたのである。後妻はまだ若く、夫でない人と再婚したり様々な選択肢があるが、先妻には夫しかいない。さらに、夫が自分を好きだった気持ちは揺るがないと信じている妻は、若くてかわいいという点で、夫が若妻を好きになつてしまつたと考える。夫は浮気したのではなく、若妻にたぶらかされた被害者なのである。なぜならば、自分と夫には、武士の信義に誓つた約束があるのである。夫のそばにいて思い続け、思い続けてもらいたいという願いには、夫が必要だが、若妻は不要である。そうして先妻の恨みは若妻に向いていくのである。

現在、個々がそれぞれ自由に生き、身分によっての行動制限がされていない今、恋人や夫が浮気したときに浮気相手の女ではなく恋人や夫を恨む人も少

なくないだろう。実際に、私の友人にこの物語をみせたところ、もしこの物語の時代が現代だったので、先妻は夫に怒りをぶつけるのではないか、武士の時代だから成立する話であると言われた。果たしてそうだろうか。私個人の考えでは、やはり浮気相手に對して嫉妬する姿勢を恋人に見せたくないという気持ちちは充分に理解できるし、現代であつてもこの考えが理解できる女性は多いのではないか。相手への嫉妬は、負けを意味すると感覚的に感じているのだ。自分のドロドロとした感情をすべて出してしまつことは恥である、みつともない、さらにそんな気持ちを浮気相手に知られてしまうのも避けたいのである。女性は他人から慘めだと思われることを避けたいのである。

本論では、主に本文を中心に先妻が若妻を殺した理由を考察していった。しかし、冒頭の引用にあつたようにハーンは、先妻の恨みが若妻に向くという考えは男性はしないが、女性は理解できるものだとした。この話に限らず、日本人女性が理解しうる、女の恨みの対象が女にいくという考え方については読み解くのが難しくまだ考察が必要だと感じた。今後の研究として、この女の嫉妬は女へ向けられるのはなぜかということ、女の気持ちがほかの男に向いたときの男の嫉妬の矛先との比較など、ハーンの他の文献や、同時代の作品を参考に進めていきたい。

参考文献

- 『怪談・奇談』小泉八雲著 平川祐弘編（講談社 1990）
- 『新編 日本の怪談』著ラフカディオ・ハーン 池田雅之翻訳（角川書店 2005）
- 『新明解国語辞典 第六版』山田忠雄（三省堂 2005年）
- 『女はいつからやさしくなくなったか 江戸の女性史』中野節子（平凡社新書742 2014）
- 『武士道の精神史』笠谷和比古（筑摩書房 2017）
- 『三くだり半—江戸の離婚と女性たち』高木侃（平凡社選書 1987）

¹ あとがき部分のみ、参考文献中の『怪談・奇談』講談社に挿る。

² 『破られた約束』からの引用文は、以下参考文献中の『新編 日本の怪談』角川書店に挿る。

³ 結婚式の意。

⁴ 貝原益軒が1710年に著した『和俗童子訓』の「女子を教ゆるの法」をもとに編纂された女子教育書

⁵ 故意に事実をいつわって告げること。特に、他人を罪におとしいれようとして、いつわり訴えること。